

発行/平成元年8月15日 No.12
えひめ地域づくり研究会議
(財)愛媛県まちづくり総合センター

まちづくりネットワーキングえひめ

舞 たうん

VOL 12

特 海外の旅から 集

- 異国情感の価値 / 亀岡 弘 … 2
- 西欧の「精神」に触れて / 長野 幸博 … 4
- 「シンガポール・香港」の旅より / 佐々木世希 … 6
- 「質の豊かさ」と「量の豊かさ」 / 関 丈夫 … 8
- マイ・アメリカ / 小清水千明 … 10
- アメリカの農業 / 清水壮一郎 … 12

研修レポ

- 柳川市「水郷水都全国会議」から … 14
- 吉田村「仲間の広場」から … 16
- 総領町「第7回逆手塾」から … 18

活動日記

- 『県境ヤング進歩'89』 … 20
- いきなサーキット … 23

研究会議 News Letter

- 「新居浜集客研究会」 … 24
- 「いきいき砥部を考える会」 … 26

MESSAGE

- あなたのコーナー … 30
- TOWNタウン パソコン通信 … 31



『異国体感の 価値』

内子町

亀岡

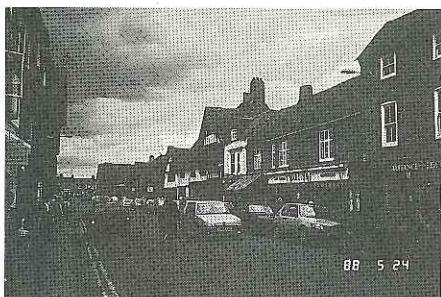
弘

人・物・金・情報等の東京一極集中が増々肥大化する中で、地方はどんどん産業の低迷・過疎化・高齢化等が進行し、このままでは地域再生はありえないのではないかという日本の現実を直視し、先進諸国の代表であるイギリス・フランス・西ドイツの各地域の振興策に学ぼうというものであった。

1、チャンス

外国へ行きたいという憧れは、ずいぶん前からあった。新聞・テレビ・雑誌などのマスメディアを通してみた外国は実際はどうなんだろう。肌で感じてみたい。この強い願望が実現したのは昭和六十一年の夏だった。現在、民主化運動に揺れる中国への初めての海外旅行で心は少年のように踊っていた。

海外への第二のチャンスが訪れたのは、昨年五月二十二日から六月四日までの全国の地域づくりシンクタンクである財日本地域開発センターが主催した「ヨーロッパ地域振興調査団」として参加したものだった。この調査の目的は、



ストラッドフォードアポンエイボンの
美しい町並み (イギリス)

イギリス・フランス・西ドイツの主な地域振興のパターンとして、大都市の劣化地区や以前の花形産業だった製鉄産業地域・過疎の進む農山村地域に、バイオ・エレクトロニクス・新素材などのハ

人・物・金・情報等の東京一極集中が増々肥大化する中で、地方はどんどん産業の低迷・過疎化・高齢化等が進行し、このままでは地域再生はありえないのではないかという日本の現実を直視し、先進諸国の代表であるイギリス・フランス・西ドイツの各地域の振興策に学ぼうというものであった。

2、地域再生



ハイデルベルグのメインストリート
(西ドイツ)

フランスのロレーヌ地方は、かつて製鉄で栄えた所であるが、ここにハイテク産業を集積させ、フランスにおいては辺境の地であるこのローヌが一九九二年ECが統合することにより、ヨーロッパ

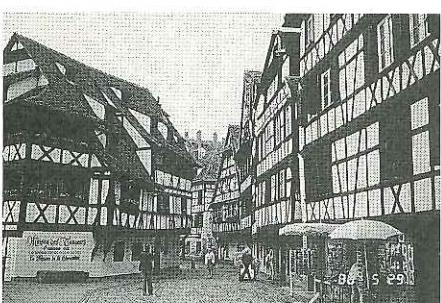
の産業型、東京ディズニーランドのような大規模なレジャーランドを建設したり、温泉を利用して保養地づくりを進める観光リゾート型、又、町並みを生かした歴史文化観光型などのパターンがあげられる。これらの地域振興の大きな目的は、

(1)雇用の創出

(2)新産業の創造

大きな目的である。

フランスのロレーヌ地方は、かつて製鉄で栄えた所であるが、ここにハイテク産業を集積させ、フランスにおいては辺境の地であるこのローヌが一九九二年ECが統合することにより、ヨーロッパ



ストラスブールの町並み (フランス)

ハイテク産業の集積は、日本でいうテクノポリス(技術集積都市)にあたるが、大学・企業・自治体が一体となって開発する産業振興

地域の中心地となり、正に辺境地域が逆転の可能性を秘めているのである。それは又、国が地方にいかに権限を与えるかということが重要なポイントになる。フランスは中央集権的な国でパリへの一極集中を招いたが、地域が疲弊することにより、国土の均衡ある発展は望めないとして地方分権法を一九八二年に制定し、パリと同等の都市を地域に十二程創ろうとしていた。

である。特に大学が熱心に基礎研究を継続し、技術のシーズを生み出している。しかし、ヨーロッパは基礎研究は強いが、日本のように製品開発、マーケティングに関する産学官の連携・基礎研究の継続的な取り組みが望まれる。今回の視察で思ったことは、地域哲学・地域情報・地域技術・地域文化の集積をいかに高めるかが地域再生の道を切り拓くものと感じた。

3 美的環境

地域情報・地域技術・地域文化の集積をいかに高めるかが地域再生の道を切り拓くものと感じた。

3、美的環境

最近、緑・森・川・景観・大気汚染等環境に関する

卷之三

ハイデルブルグの民家と緑の調和 (西ドイツ)

美觀といった価値を重視し、自治

ハイデルブルク
ロッパの町並み
は、国が経済的
側面のみで図り
えない町並みの
持つ情緒性や安らぎ、アーチitectural
とどこで共通のテーマ、素材が見
つけられるかが大きな課題となる。
そのことにより外国からみた日本の位置、世界における存在を確認
できるのである。

ロンドン・パリ・フライブルグ、ハイデルブルグの町並みは日本のよう過大広告、電柱などがない

重を推進し、そのことによつて観・環境に対する町民の意識もすいぶん高くなつてしまつたものと思われる。

戸時代末期から明治にかけて木ろうの生産で栄えた当時の商家群が残っていたことから町並み保存運

い心を重視する時代となつて、人間にとつて改めて自然とは、景觀とは、環境とは何なのかを考える時代となつた。私の町内子も、丁

体・住民が協働して保全再生していく。

た。そのためにはまず何よりも人のグローバル化を進めていくことが大切だと思う。まず人の交流があり、心を通い合わせ、その後にモノ・カネが動いていくシステムを作っていくことが今後の日本には重要だと思う。

東京にはない情報・技術を集積することにより、地域再生への可能性は高くなる。「人のグローバル化」を地域再生の視点に立って大きいに進めよう。チャレンジは可能性を生む。

地で聞き 東京を通しての外交で
なく、グローバルなローカル外交
がヤル気があればできるという実
践の価値を感じた意義は大きかつ

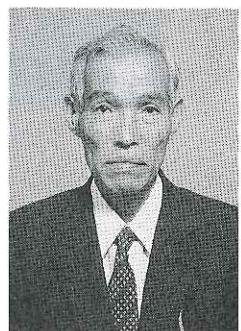
国と言わねながらも、現実に現地に行ってみて乱立する日本企業、かつては日本の先進国であつたイギリス・フランス・西ドイツが日本の調査団や企業を大歓迎してくれる現実に接した時、本当に日本は経済大国、技術立国になつたと実感できる。そして大分県が吹州議会にECC統合を目指して、市場参加をねらい交渉している話を現

西欧の「精神」に触れて

五十崎町

長野

幸博



長野 幸博さん

そうである。

西欧は古くから農耕と牧畜を生業としてきた。多数の山羊や牛や馬などを放牧するため大規模に森林を拓き牧草地とし、徹底的に自然（森林）を破壊してしまった。

この状況に危機感をもった当時のプロシャ政府は今から二百年前の林地での放牧を禁止し、森林の育成を図つ

た。これ

を契機に

西欧の森

林は蘇つ

たそうで

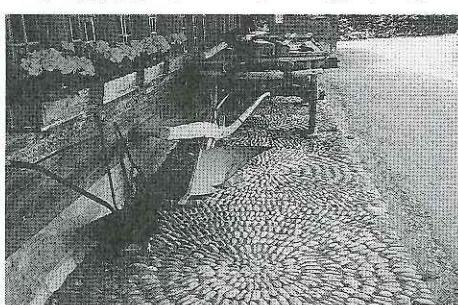
ある。

日本と西欧の自然・景観・公（パブリック）に対する認識の違いが町のデザインの差となつて表われているのではないか。

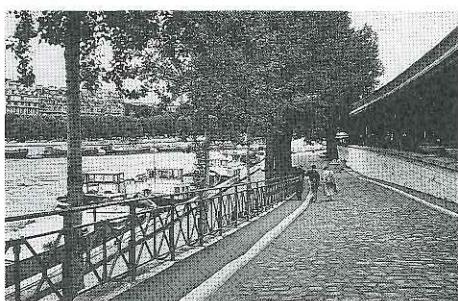
日本は亜熱帯に属し、植物相の種類も多く、自然は大変豊かで、自然の回復力も早い。

（1）町が美しいこと
パリ郊外の農村やスイスの山間の村等、どの町を見ても町全体が一様に調和がとれていて美しさを保っている。

すり減った石畳には、木や花が



▲農村（スイス）



▲セーヌ川（パリ）

コントロール出来るものとしてとらえる考え方方が強く、自然は、人為的に守り育てていくものであるという思想もこの時代に定着した

一考を要するのではないだろうか。

箱庭的美意識（私）を地域や暮の空間にさらけ出し、西欧の公（パブリック）意識と融合させる

元に戻すのに多くの時間を要する日本人は、自然と一体化した民

族であるとよく言われるが、外に開かれた大自然でなく、生花・盆栽・庭などの閉ざされた自然を好みではないかと感じる。勿論、生花・庭園等は、日本が世界に誇る美であり文化であるが、野山に自生するランやツツジなどの野草

族であるとよく言われるが、外に開かれた大自然でなく、生花・盆栽・庭などの閉ざされた自然を好みではないかと感じる。勿論、生花・庭園等は、日本が世界に誇る美であり文化であるが、野山に自生するランやツツジなどの野草

アメニティタウンづくりの共通認識へもつながっていくと思う。

(2) 町が静かであること

日本では、電車がホームへ入つてくる場合、「○番線に電車が入って参ります。危険ですので白線の内側へお下がりください。」とか「ドアで手をはさまないでください」など、小さな子供に注意するような内容の構内放送がひっさきりなしに流されている。

西欧では、ベルも放送も一切なく、時間がくれば静かに発車する。この違いは、一人ひとりが自らの責任で判断することの考え方が定着しているかしていないかによるものと思う。この根底には、西欧では、「自由」のとらえ方が、市民レベルまで浸透し、生きるということは、あくまで個の問題であり、自立・自助の精神が確立されているからではないだろうか。

最近観たフランス映画「さよなら子供たち」（ルイ・マル監督）の中で、教師が十歳くらいの子供達に対し、「学校は自由の使い方

を教えるところだ」と話しているのを観て、自由・民主・責任といつ生きていく上のルールをしつかりたき込む教育の仕方に、感銘を受けたのを今思い出した。

一方日本では、帰属意識が強く

画一化・没個性化し、「個」を前面に出すと、あらゆる場合で衝突し、組織を乱すものとして仲間はずれになってしまいます。

国際化を考える場合、何も海外へ出なくとも、暮しの中のつき合いで中から、考え方の違いや共通点を見い出し、その人のもつている文化・ライフスタイルを認め合うことが大切であると思う。人間は一人ひとり個性を持ち、変つて

いるのが当たり前で、変なヤツ、異風なヤツを排除しないで、違の町から新しいモノを創造していく視点が、国際化・情報化時代の町づくりに必要だと思う。

(3) 時間がゆったりと流れていること

フランス人の日本都市計画研究家アンギス女史の通訳により、パリ・パリ郊外・リヨン市を三日間つきつきりで案内いただいた。

河川や古い町並視察等大変わただしい日程であったが、食事になると一転して時間がゆったりと流れるのである。

私は、時間がもったいないので昼食は三十分位で済ませ、他の所を見て回りたいのだが、一度レストランの中へ入ると、視察の時は日本人に合わせて行動していた彼女は、一フランス人に戻り、メニューをゆっくりと見て注文をし、会話を楽しみながら食事をし、最後にデザートも一つ一つていねいにメニューを見ながら決め、二時間

た時間の流れの中食事を終えるのであった。

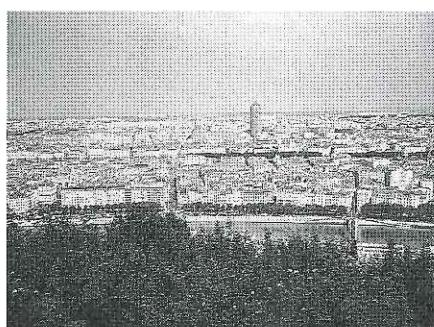
私たちは、「早メシ、早グソも芸のうち」と言って、早く食べる事は善であるとして育ってきたが、西欧では違うのである。西欧では

料理や酒、そして食事をすること

の本だから何もあわてることはなくゆったりと過すのは当然なのだろう。そこに奥深い豊かさの一部を垣間見た思いがした。

西欧を旅し、自然の使い方、自由の使い方、時間の使い方、町の使い方等を見て、本当の豊かさとは、モノやカネでなく、文明を手段として、文化を創造し、意気に感じて死ぬことだと感じた。

私たち日本人は、もはやヨーロッパから学ぶべきものはないと言う人も居るが、私たちは、ヨーロッパからもアジアからも動物からも草や木からも、まだまだ学ぶべきことが多い。



リヨン市全景

★特集★

『シンガポール・香港』 の旅より…

新居浜市

佐々木世希

二十世紀を総括する建築、ノーマン・フォスター設計の、香港上海銀行を行こうということで、計画を始めたが、せっかく香港まで行くなら、東洋で最も美しく都市整備されたシンガポールもぜひ見てこよう、建築士事務所協会中心の十三名が雑用に忙しい時間を調整して、四泊五日のシンガポール、香港の旅が始まった。

大阪からJレセセ三便でシンガポールへ出発、予定表では五時間ということで、もう着くかなと期待していると、時差が一時間ということで結局六時間も乗ることになってしまった。

中国人も、マレーシア人も、同じ

シンガポールは、コンピューター電気通信さらに金融の各分野でハイテク化が目ざましく、今やある面で先進国並に発展している。都市中心部には、丹下健三設計による、銀行・シティテレコミュニケーションセンターなど、所狭しと林立している。丹下健三オンパレードである。シンガポールがあまりにも日本化されたというか、日本の建築家・建設業社の進出に、目を見はるものがあった。

生活の面でも特に住宅に関しては、近隣諸国も羨む、近代的な団地群が続々と出現し、今や質量とも世界最高水準に達したということだ。住宅こそ、国民生活の基本、政府の独立以来とり続けた政策らしい。この政策の成果で、国民のほぼ八割が、公団住宅住まいである。公団住宅といつても、日本の「遠・高・狭」とは大違いで、都

シナガポールの整然と都市計画された、街路樹も道路におおいからさる程に大きく、又美しさを保つために、法律で規制をしながら創始をして二〇〇円足らず。又ダイヤル直通なので国内と同じ感覚である。その上、新居浜・東京よりも日本人的な意識が、少し見習う必要がありそうだ。

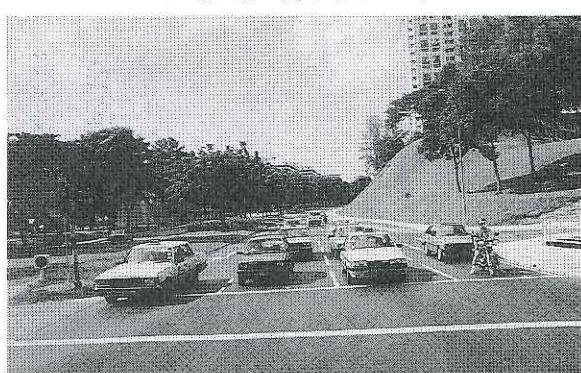


▲ 公団住宅（シンガポール）

▼ 街路（シンガポール）

りあげた都市景観に対して、香港での第一印象は、あまりにも自然発生的で、生活を隠そうとせず、その裏側も見せてしまう、その迫力にまず圧倒されてしまった。

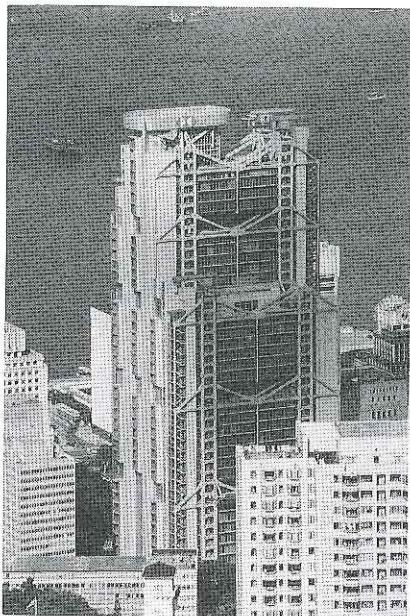
香港は、一〇〇万ドルの夜景で知られる香港島と九龍半島からなる。そして、香港島のセントラル地区に、今回の旅行のきっかけとなつた、香港上海銀行がある。胸の高鳴りを押さえ、待ちに待つた上海銀行を目の前にして、参加者



全員が、「あっ」と声をあげてしまふ程、すさまじい建築であった。

現代の技術の粋を集め、極度にハイテク化されたこの銀行は、吊り構造をダイナミックに表現し、工業化された部品の一つ一つを洗練させていった、フォスターの脅

建物を正面から見ただけでは、想像はつかないが、側面から眺めるところ、このニックネームはなるほどと思われる。屋上に飛び出した、クレーンとクロスした筋交いがつくり出すイメージが蟹そのものである。香港の雑多な環境の中で不



香港上海銀行

威的なデザイン力や構成力に脱帽する思いであった。これぞ、ハイテクデザインの最高水準、二〇世紀の総括的建築といわれる由縁であろうと自分自身納得してしまった。この香港上海銀行も、香港の人達は「蟹ビル」と呼ぶらしい。

似合いなこの建築も、香港の人達は持前の生活感覚で、自然発生的な街へと同化しているようである。この香港も又シンガポールと同じく、日本の進出が甚だしく、松坂屋・大丸・三越・そごう、と日本人達は「蟹ビル」と呼ぶらしい。



▲九龍城 (香港)

治安が悪いということで、周辺をバスに乗ったまま一周した程度であつた。後日、テレビ等でこの九龍城が放送されるたび、必死でテレビにかじりついていた。

香港滞在の最終日、参加者の強い要望で（ガイドは強く拒否したのだが）九龍城砦の見学に向つた。

ズウェイベイ地区に軒を並べている。買ひものは、円で十分通用するし、逆に円を好んでいるようである。円高日本を象徴しているかのようである。

たまたまINAXの写真展が、写真家宮本隆司氏の「九龍城砦」を東京で行ったことから、ぜひ松山でもということになり、INAXの協力でラフォーレ原宿においてその写真展を開催した。薄暗い雰囲気の中、宮本氏もこの写真展にピッタリの会場、とお褒めの言葉を頂いた。

このように、旅での感激あるいは、後日その旅先での話題がテレビ等で流れるたびに、この旅行の感激が薄らぐことなく、その都市、その建築、そしてその人々との関わりを再度あじわえる。

旅行つてほんとに、いいものですね！



★特集★

『質の豊かさ』と『量の豊かさ』 ——ニュージーランド・ニューカレドニアを訪問して——

市山 関 丈夫

◎夢と現実の島

「ニューカレドニア」

約一ヶ月の研修期間のうち数日を、私達はニューカレドニアで過ごしました。

「天国に一番近い島」として紹介された同地は、美しい珊瑚礁と青い海に囲まれ、一見すると「天国」そのものである。

しかし、こうした夢にあふれた光景とは裏腹に、主要産業であるニッケル精錬工場で私達は、考えさせられる現実に出会った。日本へも多くのニッケルを輸出している同工場の労働環境は非常に厳しいもので、五分も歩くと口



関 丈夫さん
(ファンガレイ市議会場にて)

本年三月、私は、ロータリークラブ主催の交換留学制度により、四国内の各分野で働く青年五人で結成されたチームの一人として、ニュージーランド、ニューカレドニアの両地を訪問する機会を得た。私は、電気事業と地域社会の関わり方、土地利用・景観整備を中心とする地域計画の策定・実践手法、さらに、余暇の利用方法等ラ Ifスタイルまで幅広く学ばせていただいた。

の中がざらざらし、頭痛がするほどである。特に、すさまじい騒音の中で単純作業に従事する老人の姿は、今も目に焼きついて離れない。

空港の免税店で土産を買いかかる日本人を見る時、複雑な思いにかられざるを得なかつた。

◎こだわりの街づくり
私達はニュージーランド最大の都市オークランドから、同国での旅を始めた。

同市を核とする圏域は九十万にのぼる人口集積地域であるが、その縁の多さには驚かされた。

また、市の中心部では、近代的高層ビルの間に伝統的建物が数多く見られ、今も実際に利用されている。

今回、私は、オークランドをはじめとして数か所の都市計画図を見せていただいた。

その中で特に印象深かったのは、土地利用方法についてゾーン指定のほか、一本の木、一戸の家を保存対象とする個別指定が相当数な

また、宅地開発にあたっては、樹齢百年にも及ぶ大木に手を加えることなく、街の一部として活用している。家を建てた後、失った緑を復活させようと、わずかな残地に木を植える日本の手法とは対照的である。

加えて、民間デベロッパーは開発により生まれた新設道路に名称をつけることが義務づけられている。

これら数々の「こだわり」によって、緑豊かで伝統を守り伝える街づくりが達成されていると言えよう。

◎生活に根づいたリゾート

今、日本では、全国各地でリゾート開発が進められようとしている。しかし、これらが目指すリゾートとニュージーランドのそれとは根本的に異なるものようだ。

日本では、主に利益主導型発想で「モノづくり」が中心である。「ビジネスに追われる人間がビジネスとして作ったリゾートを、ビジネスの合い間にかけ足で利用する」これが日本型リゾートの予想

される姿ではないだろうか。

約一ヶ月の滞在期間中、十件にあまるロータリークラブ会員のもとでホームステイを行った。ホストの方々は文字通り各界のリーダーとして、社会・経済の発展のために活躍されており、多忙な日々を送っている。

しかし、休日は全く仕事から離れ、各々が各自の方法で余暇を活用している。決して「人並」を意識しない。

また、彼らのリゾートライフに必ずしも施設は必要ではない。空、海、風、緑、そして悠然たる時の流れまで、身の回りにあるすべてのものを彼らは楽しむことができる。

◎「量の豊かさ」と「質の豊かさ」
ニュージーランド人のリゾートライフは、まさに、彼らの生活の「質の豊かさ」を反映したものと言えよう。同国は、日本人の価値観によれば先進国ではない。むしろ、農業中心の発展途上国であると言えよう。しかし、人々の暮らしにどこか豊かさを感じるのはなぜだろうか。彼らの生活の中には日本人が「量の豊かさ」を獲得するまでに失ってきた、人として大切なものが維持されているからではないだろうか。家族の語らい、他人への思いやり、立ち止まって考えるゆとり等々。

私は、各ロータリークラブのスピーチで茶道の精神である「和敬清寂」を紹介した。「相互に思いやり、敬い、清らかな心と何ものにも動することのない穏かな心を持つて茶に向う」私なりの解釈であるが、これこそ今の日本人が大切にすべき

精神ではないかとロータリー会員の前で訴えた。

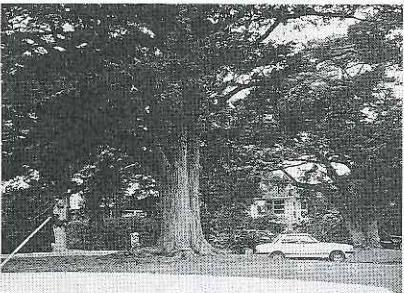
現在、ニュージーランドは「量の豊かさ」を得る方向に発想を転換しつつある。その中で数々の迷いも出ているとのことであった。「質と量」それぞれ異なった方向を目指そうとしている日本とニュージーランド。互いに学び、助け合うべき所が多いように思う。

◎国造りの実験
近年、ニュージーランドでは、国有部門の民営化、中小自治体の合併・再編成等、構造変革が進められている。「三百万程度の人口でいかに一国の発展をはかるか」をテーマに、今ニュージーランドは壮大な国造りの実験に乗り出しつつあるよう見える。また、それが可能な若さも持っていると私は感じた。

日本も二十一世紀に向けて、歴史上の大きなターニングポイントに差しかかっている。しかし、自由かつ柔軟な発想で国造りを語り推進していく若さとエネルギーが充分にあるかどうか、やや疑問を感じる。

「多様化」「独自性」と言いながら、結果的には「画一」になってしまふわが国の地域開発。今、基本から考え直す時ではないだろうか。外から日本を眺め、私は強い危機感を持つと共に、課せられた大きな責任も感じた次第である。とは言え、非力な私のこと。当面は今回、見・聞き・感じたことを可能な限り多くの人に伝え、共に考えていくたいと思う。

(八月より高松市の
四国電力(株)関連事業部へ
転勤されました)



▽ 古木を生かした住宅地

近代ビルの間の
伝統的建物
(タウン・ホール)



▽ 古木を生かした住宅地



ロータリークラブのスピーチ

「マイ・アメリカ」

吉田町
小清水千明

三年前、私は二十日間、アメリカへ行ってきた。

アメリカと言えば、「自由の国」というイメージだ。現に、市民が自分の意見を主張する為に、警官に言いかかる所も見た。しかし、その自由の陰に、国旗や国歌に対する忠誠心というものが、人々の心中に大きく根づいていたのには驚いた。

ロデオ会場では、ロデオが始まると前に、国歌が流れ、国旗が会場を一周する。その間、皆、起立脱帽し、国歌を合唱する。そして、それが終わると、またもとの鳥合の衆と化すのである。この忠誠心こそが、大国アメリカを支えてき



チャイニーズシアター

がなければ、人の住めない場所である。それに比べ、日本の住みやすいこと。自然に恵まれるという言葉の意味を、改めて考えさせられてしまった。しかし、この自然の有難味もわからず、次々と自然破壊していく日本人達。自然の力をうまく利用し、共存していくことが必要であろう。自分達の力を過信し続けていると、手痛いしっぺ返しが来ることだろう。

ホストファミリーは、カイラ―という姓。御主人のチャーリーさん、奥さんのバーバラさん、あと息子夫婦と子供二人。みんな暖かくもてなしてくれた。楽しんでもらおう、いい思い出を作つてあげようという気持ち

が伝わってくる。

日本人だから……

(多少あるかもしれないが)つき合つてくれた。人種の

多い国だけに、当たり前のことも



すごい！

がなければならない場所で

日本人はどうだろう？特に田舎では、外人はすべての面で拒絶される。言葉が通じないという事が最も大きな要因だろうが、それだけではないと思う。

私の住んでる吉田でもそうである。新しい考え方を持つと必ず考え直せと説得される。実行に移すと邪魔され、つぶそとすると現れる。そういう者が自分の意見や考え方を持っているかと言うとそうではない。ただ、昔からの風習だから、とか、みんながやっているから、という理由しかない。そうして新しい芽を摘んでしまうものだから、新しい考え方を持つた者は黙つてしまふか出ていくつたり前のことかも

しれないのだが……。

日本人はどうだろう？特に田舎

では、外人はすべての面で拒絶さ

れる。言葉が通じないという事が最も大きな要因だろうが、それだ

まう。結局、若い者を追い出す様な事をしておいて「うちの子に嫁を」などと騒ぎ立てている。なんともやりきれない。

話はそれてしまつたが、アメリカ人の開放感や自由な発想などは見習わなくてはと思う。アメリカ人の爪でももらつてくれればよかつた。その爪のアカを煎じて…。

この旅行（海外交流）には、十五才から三十五才までの全国から選ばれた三十数名が参加したのだが、ホームステイさせてもらったお返しを招待し、ジャパンナイトというお祝いの交歓会をする。

私が弱冠二十五才で責任者となつたのだが、すごくまとまりのあるいいものになった。年上の人達が、ほとんど私の指示に従ってくれ、気付いた所は適切にアドバイスしてくれた。また、個人的に年下の

者達をひっぱつてもくれた。海外に出ているからこそ出来たのかもしれないが、こういう体験は地元ではなかなか味わうことの出来ないものだ。一つの目的に向かって働く集団の見本の様な姿だったなあとつくづく感じる。

好評だったジャパンナイトの内容は、アメリカの歌、日本の歌を

二曲づつ、ダンスはフォーカダンス二曲と佐渡おけさをホスト達と一緒に踊った。クイズは○×式でまちがつた人は席に戻つてもらう方式。アメリカでは、こういうやり方がないのか、始めはとまどつていたが終わりになる程もり上がりつた。

劇は「桃太郎」をした。すべて英訳し、出演者に暗記してもらつた。アドリブは出るわ、各々の役者の個性も手伝つて、ホストファミリー達に大うけだつた。これまで

にない喜び

ようだつた
そうだ。
もちろん、私

達も十分満足だつた。

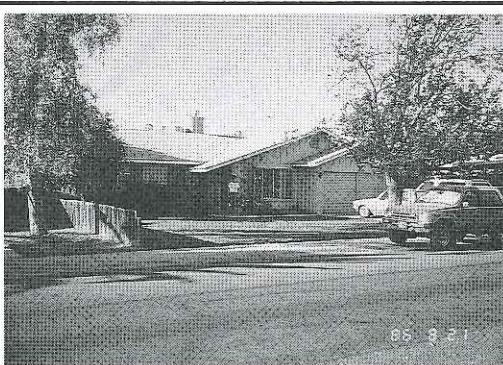
世界中、
国はちがつ

だといふこ

とを痛感し

た。また、普通のツアーリ

アリゾナ州“メサ”
(ホストファミリーの家)



ホストファミリーの
▼ カイラー夫妻と



ジャパンナイトにて
(裏は日本の旗)

では見ることの出来ない面も見る

ことが出来た。

吉田町には、陸育英会というも

のがあり、年に二～三名は海外派遣に参加出来る。自分の肌で世界に接し、広い視野を持つ目を養える。若い人達の少しでも多くの人に海外へ行つてもらい、外から日本を見て欲しい。ぬるま湯につかっていたのでは、暑さ寒さもわからない。外から見て、善し悪しの判断が出来る人こそがこれからの中に必要なんじゃないだろうか。

アメリカの農業

双海町
清水壮一郎

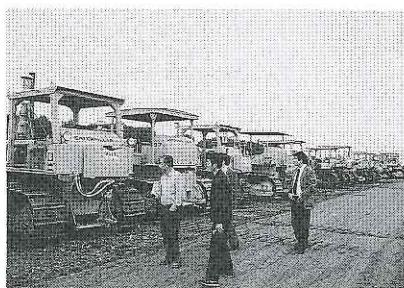
岡本さんと清水さん

双海町では、昭和六十一年度を町づくり元年と定め「人づくり十一年計画事業」がスタートしました。この事業は、町づくりは人づくりからという町当局の発案で、青年を海外へ派遣し、研修を通じて視野を広め、双海の姿を正しく理解してほしいという考え方で行われています。

岡本廣志君（農業）、伊予鉄觀光の中田さん（双海町出身）との三人で“世界のパンカゴ”超大国アメリカへ旅立つたのは小雪の舞う二月二十五日。私達は責任の重さを痛感しながらも、始めて行つ

たアメリカでの十六日間の日々は、夢の様に過ぎて行きました。

シアトルはカナダに接するワシントン州最大の都市です。ボーキング本社がある事でも有名で、水と緑豊かな美しい町。“エメラルドシティ”的愛称で呼ばれています。北の玄関シアトルから東へ約三百キロ車で走つて、モーゼスレイクの町へ着いた時「広い、さすがアメリカ」とただただ驚きました。想像していた以上のとてつもない広さです。右も左も、見渡す限り農地が続いています。この地方では、じゃがいも・玉ねぎ等を耕作していく、私達が訪れたヒラ



コーダ農場のトラクター

ドスパロスの町は、サンフランシスコから南へ二百五十キロ行つた所にあります。コーダ農場は、ドスパロスで水田・畑作・精米工場を経営しています。水田作付面積は一千町歩。トラクターの所有台数が四十三台。機械置場に並んだ、大型トラクター・大型コンバイン・トレーラー式回送車・大型整地車等を見ていると、アメリカ農業の底知れぬ巨大な力に威圧されると感じます。

広いアメリカでも、日本人向けの良質米が出来るのは、カリリフォルニア地帯だけで、南部の地方は気候、風土が違う為、パサパサした長粒子米しか出来ません。カリフォルニア地区の最近の作付面積は十六万町歩。日本国内、水田面積の約五パーセントになります。

サンフランシスコとロサンゼルスの中間に位置するバイセリアは「夢のカリフォルニア」「カリфорニアの青い空」のイメージ通りの、緑豊かなオレンジ園の続く町です。この地方は、レモン・オレンジ・オリーブ・ぶどう・ミネオラ・プラム等の果樹栽培に適した

所で、山頂に雪をかぶったシェラネバダ山脈のやまなみが印象的でした。

ウオタ農場は、百町歩で果樹栽培をしていて、温州みかんも作っています。温州みかんは、皮がむきやすくて、種が無く、味が良いので人気があり、テレビを見ながら食べる事が出来るので「テレビオレンジ」と呼ばれています。

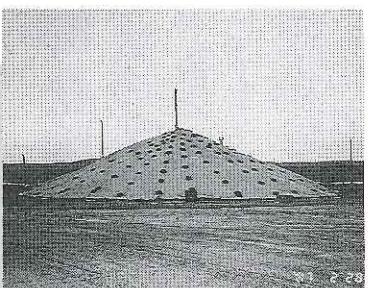
ウオタ農場では、温州みかんを八町歩栽培しているが、農場のあるバイセリアでは、四月から九月まで雨が降らない為、みかんの糖度が十一から十二度になり、外觀は悪くても良く売れるので、今後増殖する予程です。

アメリカでは、農業の考え方を聞いて、「農業後継者はいるのか?」との問い合わせに、農場経営者は、「自分の子供がいても農地を子供に贈与する事はしない。子供が農業をするのなら、農地、機械等の財産は子供に買ってもらう。もし子供が買えないのなら、土地・施設は他人にでも平氣で売るし、買い手がな

ければ銀行等に売却して、老後の生活費にする。農産物を生産するもので、土地に執着せず、住み良い所で生きる為、自分の為、家庭、地域・社会とは別だ。」随分割り切った考えだと思いました。

このアメリカ農業に一番大切なのは“水”です。と言うのも、ワシントン州の畑も、カリフォルニアの水田、果樹園も灌水をしないで放って置くと、草も木も生えない砂漠になってしまふからです。

ワシントンの畑は、グランドクリーダムが完成して安定した生産の出来る農地になり、カリフォルニアの水田、果樹園は、地下水を汲み上げて栽培しています。

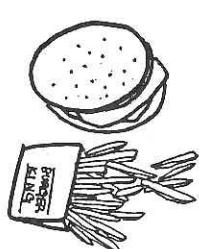


(モーゼスレイク) 麦の簡易貯蔵

アメリカの地下水は無限にあり、埋蔵量は毎日流れるミシシッピ川の約二百年分の水があると評価されています。しかしアメリカの地下水は、一度使うと貯える事が出来ません。農業では、高い金を出して地下水を買っています。水が高い為に水田地帯では、雨が少ないと予想される年には、作付面積を減少して対応しています。又、水不足になる地下水、ダムからの水は生活用水が優先して、農業用水には回してもらえません。

アメリカは、輸出産業としての農業だが、日本は国民に新鮮で安全な食料品を供給する為の産業。元来、同じ土俵で競争するのは、国境がなくなってきた現在、自由化反対等と言つておられません。

息子に語れる父さんになってほしい。
（双海町役場
若松進一さんより）



（双海町役場
若松進一さんより）

を守り、繊細な日本人に合う食料品、農産物の生産に励みたいと思います。

日本人には日本人にしか分からない食生活、食文化があります。私がアメリカから帰つて、まず食べたかつた物は、双海で捕れた新鮮な魚にミトセをつけ、熱燗で一杯。夢にまで見た味でした。

日本の国土を生かして、緑と水

第五回 水郷水都全国会議

水循環の回復と地域の活性化

——柳川堀割から水を考える——

(平成元年五月二十七～八日)

(財)愛媛県まちづくり総合センター

石川 元英

水郷水都全国会議が五月晴れのもと、福岡県柳川市に、全国各地で水環境の保全・再生の運動に取り組んでいる約一、二〇〇人が参加して開かれた。

この「水郷水都全国会議」は、

一九八四年(昭和五九年)琵琶湖での世界湖沼環境会議がきっかけとなり、湖沼等の保全に情報交換の場、集会を定期的に開こうと呼びかけられ始まった。

第一回は、宍道湖・中海の淡水化問題でやっていた松江市。第二回が淡水化以降、アオコの発生で問題となっている土浦市。第三回が富士山の湧水の恵みで発展してきた富士市。第四回が日本最後の

れいな川・堀などの水環境とのふれあいであった。だが、この水環境をたった三十年ほどの間でダメにしてきた。もう一度、この素晴らしい水環境を取り戻し、次世代へ任であり義務である。頑張っていくつもりである。』

この力強い発言で、柳川市の住民・自治体のこれまでの活動の経緯、想いが集約されていた。ような気がした。

この基調報告を通して私達の忘れ



ていたものを想起された。生命人類全ての源、水なくして何も成りたたない現実をあらためて考えさせられた。

「ひとりひとりの力できれいな水へ」と題して、筑後川水問題研究会の広松伝さんより報告があつた。

『一日の始まりは、朝起きて飲む一杯の水からである。世界中の飲み物のなかで、水ほどおいしいものはなかった。今は昔の話となってしまった……。私の人生のな

かで、一番すばらしかった事はき

野田佳江さんより大野の地下水を守る実践のあゆみが詳細に報告された。

地下水のユートピア、今まで言われるほど豊富な地下水を生みだす福井県大野市は、周囲を一五〇メートル前後の山々に囲まれた盆地で人口四二〇〇人ほどの北陸の小さな城下町である。夏は冷たく、冬は暖かい地下水がおいしいことでも有名である。

この大野の地下水環境に異変が、昭和三〇年代に入り起こりだした。ダム開発、原野開発、農地基盤整備など、自然環境の破壊と家庭の井戸電化、工場の大

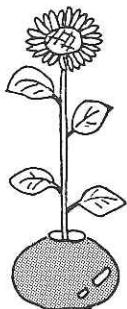
量揚水などが重なり、豊かであったはずの地下水が渴れ始めたのである。

この問題にいち早く目を向け、『地下水を守ろう』と立ち上がったのが、普通の主婦であつた野田佳江さんであつた。

「自分たちのできる事から」と言うことで、家庭用水の徹底実験、婦人会などの節水運動など地道な活動から地域住民・行政まで巻き

○分科会

六つのテーマのなか、私は「基礎調査」での広松伝さんの発表の



込んだ形での活動へと拡げてきている。少しずつ、実を結びつつあるらしいが、まだまだ大野の水を守る道は遠い。

『水の問題は、くらしすべての問題であり自然と調和した有限の地下水をまた、自然を子供たちに残していかなければならない。私たちは現在、便利だから、お金儲けのためにとかでこの自然(天然)の水を粗末にしたり、水を汚したりしている現状を受けとめていく必要がある。

いま、それぞれの立場で出来る事からやる。主婦は主婦で、男性は男性で、行政の担当者は担当者で、その人たちなりに話し合い、誠実に未来に向かって大切な水源の環境を残すために、どう力を合わせていかなければと考え、今日、今から実践していかなければならぬ』との報告であった。

○全体会

各分科会の後、「柳川宣言」が採択された。

注目されるべき事として上げら

なかで「汚れた水をきれいにする事も大切であるが、それよりも、いかに汚れた水を作らないか?汚れた水をどう捨てるか、をもつと考えていくべきである」との発言

が印象深く、水の再生への必要性を強く感じた為に、第四分科会「水の再生、捨て方を工夫する」に参加した。

事例報告の方々は、それぞれの地域、主婦、女性の活動者の報告であつたが、私達が何気なく使つてゐる合成洗剤の人体・自然に与える影響を訴え、女性特有の感性、ねばり腰でもつて、石ケンへの普及を目指し、地道ではあるが確実な成果をもたらしていた。誰でもできる事からの研究、勉強には頭の下がる想いがした。

共通した問題、これから活動として、地域ぐるみ、みんなの力の必要性、次時代を担う子どもたちへの理解の必要性を訴えていたのではないか?

今回の参加は、忘れていた水空間をもう一度見つけ直すよい機会であった。一番身近であり、一番大切なものである筈のこの空間を「どうにかしなければ」という想いにさせてくれた。

断ち切ることのできない水との関わりを、もう一度考えよう!!

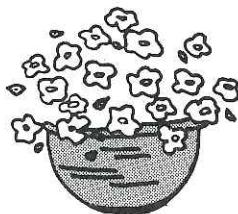


研修レポート

地域づくりシンポジウム

『仲間の広場』から

—花と子供のいる風景—



(財) 愛媛県まちづくり総合センター

豊田 渉

五月二十・二十一日の二日間、

島根県吉田村において、みどりの

日・木の国文化館竣工記念工事と

して「地域づくりシンポジウム

「仲間の広場」が行われた。子供、お年寄り、そして現役の皆さんが共に語り合い、そこで生きている尊嚴をみんなが理解しあうというのがテーマである。

島根県吉田村といえば「鉄の歴史村」という堅いイメージ、アカデミックだというふうに思われがちだが、今回のシンポジウムでは、いかにやわらかさと暖かさを出せるかという初の試みとして、女性だけによるパネルディスカッションがあつた。

女性がどういうふうなまちづくりをしていくのか、女性の感性の必要性、そしてその活かし方など、参加した人の力で知識となれば、これ以上のことはないというものだ。

●パネルディスカッション「花と子供のいる風景」
パネラー 内藤美智子(吉田村出身)

坂本ゆり(岩手県岩泉町)
金釣文子(徳島県監住町)

コーディネーター

藤原 洋(吉田村参事)

△坂本▽ 主人と北海道でめぐり

あい、夫の家がある岩泉町へ。花が好きでムギワラギクを町のシンボルにしようと一粒の種から、町内に輪が広がった。原点は愛(主人とのめぐりあい)だった。オリジナルドライフラワー「アトリエ

野のはな」は、女性だけのスタッフで地元の人。今、農園・工房・教室をもつてている。

△藤原▽ 金釣さんは、梓にはめない実践を重んじるなど、子供の

主体性を大事にして、限りない可能性をひきだすことを児童館の指導員で行つてきたが、子供、花について何か?

△金釣▽ このやわらかいパンフレットが届いた時、これが本当に吉田村から?と感激。最初、児童館にかわった時、子供が遊びを忘れていると想い、遊びながら花づくりをしていこうとした。花づくりの中から、みんなで何かをとい

うことで「おばけわんぱく夢屋敷」という行事をやつた。

△藤原▽ 内藤さんは吉田村出身ですが、ふるさとについて何か?

△内藤▽ 私の生まれた母の故郷である東北、小学校二年生までいた島根県日原町、そして吉田村の三ヶ所が浮ぶ。病気をして娘を吉田村に預けたが、村を思わない日はなかつた。ものを書くようになつて、あたり前の風景が光つってきた。

病気をしたことで、もう一度確認するような感じで書いている。
△藤原▽ いなかのライフスタイルについて坂本さんはどう感じますか?

△藤原▽ いなかのライフスタイルについて坂本さんはどう感じますか?



坂本さん

金釣さん

内藤さん

△坂本▽ 人は皆、愛を求めてい

る。主人と子供がいなければやれなかつた。子供には胸を張つて、岩泉出身ですと言つてほしい。ま

た、自然は美しいが、手をさしのべなければ助けてくれない。工夫すれば、都会よりずっとといい。

藤原 洋さん



△藤原▽ 時代はどんどん豊かに

てくれたのを思いだす。
△金釣▽ ある時子供が「花が笑つた。」といつた。その言葉に対し「本当に笑っているね。」と言うことで、子供はまた新しい感性を發見していく。それを大人が、へしあつてはいけない。

△藤原▽ 吉田村で今「美しい一

景運動」にとりくんでいる。花のもつ人とのかかわりあいができるばと思う。みなさんの今後は?

△坂本▽ 愛と一粒の種をスターにしてやってきた。グループを大切にしたい。子供と一緒になつた“幼稚園”みたいなものをつく

りたい。

△金釣▽ 今まで児童館の子供たちに教えられたことを、今夏オーブンする「藍の館」にいかしたい。

△内藤▽ 私が子供のころの大人はちがっていたのでは。朝早く草刈りをしている光景が思い出されるが、どういう訳か、花だけを残して回りの草を刈っていたのが印象的だった。

△坂本▽ 美しいものを子供にたくさん見せることでは。小さいころ母が私たち姉妹に、花壇を与えてくれたのを思いだす。

△藤原▽ パネラーの方々からの

体験は、みんなさんの感性で受けとめてほしい。

○

はじめて訪ねた吉田村。島育ちの私にとって山村は珍しかつた。

島であれば山頂に立つと両方の海が見渡せ、これだけしかないと島の大きさが実感できる。陸地部ではその実感がつかめない。狭いといいながらも日本は広いのだ。そ

の中に豊かな自然と古い歴史、独特な文化。そういうものを精一杯活かした地域づくりが一番いいのだからと感じた。

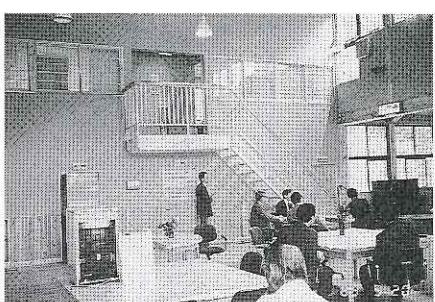
吉田村では、菅谷たら山内の復元、鉄の歴史博物館、オープンエアミュージアム、吉田グリ

ーは、児童館の子供たちに教えたことを、今夏オーブンする「藍の館」にいかしたい。子供たちが、触れて遊んで参加できき緑と花のあるものにしたい。

△内藤▽ 自分の思うままに書いている。ふと気がつくと吉田村のことを書いていることが多い。あたりまえのことは今、驚嘆に価す

はないのだと思う。

今、淋しいことではあるが周囲から少しずつ、自然が失われてきている。その自然や子供を見る目の陰に、地域づくりの原点が隠されているのではないかと、ふとそう思った。



木の国文化館内部

『旅人』との出会い

—第7回逆手塾から—

(財) 愛媛県まちづくり総合センター

幸地慎一

△記念講演から▽

●湯布院からの「旅人」

自らを旅人として、この地に何をもたらせばよいかということで、メインゲストである大分県・湯布院町の中谷健太郎さんは、二十数年間にわたって繰り広げられてきた湯布院の足取りを中心に紹介があった。淡々とした口調の中に全く気負いが感じられず、人としての温かさに共感を覚えると同時に、教えられたものが数知れずあつた。

●ムラが「変わる」ことの意味

ことは、農村の人々にとっては確かに非常に辛く苦しいことであるが、自らの力で乗り越えることなくしては現在の湯布院もあり得なかつたということなのだろう。地域住民が主体性を持ちながらいかに戦つていけばよいのかを考えさせられた。

忘れてならないのは、活動の舞台である湯布院の歩みの中で、時代の流れを敏感に感じながら、自らまちやむらが変わっていくこと

の本質をとらえ続けてきた「時代の目利き」が中谷さん達リーダーだったことである。

●人がいてこそ

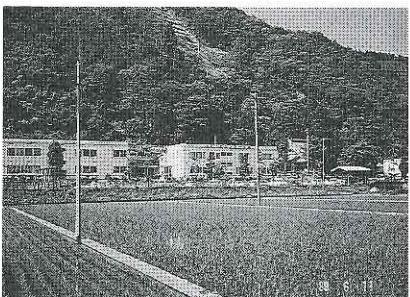
中谷さんの経営する旅館は、二つの部屋に九十九人の人達が働く。そこにあるものは効率優先主義の近代経済学で割り切れない営みである。その為に、いつも地元の人の能力を最大に引き出しながら、足りない部分をしたたかに外から呼び寄せる。従つて、昔ながらの業態や暖簾にこだわり続ける事無く、ここで快適に生活していくための手段としての生産があるのみなのだ。

●第二期の湯布院時代に向けて

湯布院では「大航海時代」というテーマで南蛮文化を見つめていながら、少し前のモンスターがきっかけだったということだが、今から

広島県甲奴郡総領町。この中国山地の小さな町に、毎年のように全国から出会いを求めて、元気印の猛者が集まってくる。

“東京でできないシンポジウム”を標榜し、次々にユニークな発信を続ける「過疎を逆手にとる会」最大のイベント、『逆手塾』は今年で第七回を迎える。今回のテーマは“感動商法”。今の時代で忘れかけているこの一番大切なものの商法という現代感覚を欠かせない言葉を組合せたという。さて、どんな駆走が並ぶのか、参加者が主催者、人源（人が資源と



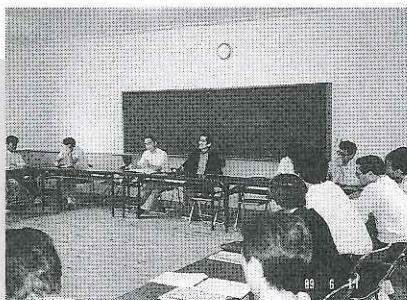
会場の「ふるさとセンター田縫」

四百年前、聖フランシスコ・ザビエルが、大分にやつてきた時代には、カトリックを受け入れ、ワインや牛を食したりと新しいものどんどん取り入れていく気風があつたという。歴史を掘り起こすことによって閉鎖的なムラを固辞する事無く、もう一度昔の元気を取り戻す運動を展開しようというのである。

これをきっかけにして時代を担うべき若者達が、これから湯布院の中に新しいものを創っていくとしている。ただ、これは決してムラおこしといった単なる目的論で終わらない、若者の意識の創造の場なのである。

△第一分科会から

この分科会では、安藤会長の音頭取りで、中谷さんが会場からの質問に答えていくという氣氛の中霧雨の中で行われた。その中の一部を紹介したい。



中谷健太郎さんを囲んで
(第1分科会)

いて、「内と外」の関係をどう考
えているか。

(A) 外からくる人のシンボルか
内で使うためのものかの境目で非
常に問題になつてゐるが、現在考
えているのは、機能としては旅の
文化研究センターとして、一村一
品を「旅」を切り口として問い合わせ
すための本拠地としたい。南蛮文
化への取り組みでわかるように旅
というもののから、別のものが見え
てくる運動につなげたい。

(Q) 「霧の湯布院」というイメー
ジを訪れるものに植え付けてきた
が、その景観にふさわしくないも
のに対する責任は。

(A) まちづくりにはロマンチス
トが多いと聞くが。

長い歴史の中で人に見られて美
しくなる、それが農村の姿である
ような気がしている。

(Q) 「霧の湯布院」というイメー
ジを訪れるものに植え付けてきた
が、その景観にふさわしくないも
のに対する責任は。

(A) ロマンチストは多い。しか
し、何か足が地についていないと
いう点では映画の世界に似ている。
商売を始めて気が付いたが、そば
はそば、コーヒーはコーヒーでし
かなく、その裏に壮大なロマンが
あるわけではない。あるとすれば、
生活の瞬の事をこつこつと積み上
げた結果ではないか。

今はすべてお仕任せの文化を身
につけることで生きている。そ
であるなら、逆に外の文化を吸収
し、徹底して自分たちのものにし
ていいといいのではないか。

(A) 「逃げ」ではなく「攻め」
るものを作りたい。もう少し上をみながら、
現実は下の方にある。そのギャッ
ブで自分が非難されるとしてもそ
れをやっていかねばならないと思つ
ている。

長い歴史の中で人に見られて美
しくなる、それが農村の姿である
ような気がしている。

(A) まちづくりにはロマンチス
トが多いと聞くが。

長い歴史の中で人に見られて美
しくなる、それが農村の姿である
ような気がしている。

逆名物の「人源パーティ」が始ま
り、ここからが参加者の手作りの
場となる。

舞台での自己紹介を兼ねて、地
域を売り込み自分を売り込んでい
く。愛媛からは、明浜町の酒井さ
んの音頭で、なぜか南予名物の牛
鬼の雄叫び?で気勢をあげた。

夜遅く居酒屋「甚六」が開店と
なるに至つて、あちこちに小人数
の車座ができ、我が想いの丈を大
声でしゃべる「私が一番」の猛者の
顔、顔、顔……。塾の主役が誰
であるのかを感じさせるもうひと
つの仕掛けが十二分に伝わつて來
るようであった。

逆手塾のゲストには、感動商法
では独自の実践をもつてゐる異色
の人材が揃つていて、いずれも新
鮮な感覚で学ぶべきところも多かつ
た。これだけのご馳走を揃えてく
れた逆手塾に、やはり脱帽の感を
深くした二日間であった。

△逆手塾の主役たち△

初日の進歩自由夢のあと、過疎

逆名物の「人源パーティ」が始ま
り、ここからが参加者の手作りの
場となる。

舞台での自己紹介を兼ねて、地
域を売り込み自分を売り込んでい
く。愛媛からは、明浜町の酒井さ
んの音頭で、なぜか南予名物の牛
鬼の雄叫び?で気勢をあげた。

夜遅く居酒屋「甚六」が開店と
なるに至つて、あちこちに小人数
の車座ができ、我が想いの丈を大
声でしゃべる「私が一番」の猛者の
顔、顔、顔……。塾の主役が誰
であるのかを感じさせるもうひと
つの仕掛けが十二分に伝わつて來
るようであった。

逆手塾のゲストには、感動商法
では独自の実践をもつてゐる異色
の人材が揃つていて、いずれも新
鮮な感覚で学ぶべきところも多かつ
た。これだけのご馳走を揃えてく
れた逆手塾に、やはり脱帽の感を
深くした二日間であった。

古くは要所として栄えた県境の町も、今は交通不便で文化的に恵まれないところといった、悲観的な見方が多いようです。

この度、県境という共通点から四国四県の交流をすることにより、お互いを高め合う場が必要ではな

いだろうかとの気持ちから、去る6月24・25日の二日間で開催された「県境ヤング進歩'89」について、

お互いを高め合う場が必要ではないうことで、現在「花づくり運動」などにも取り組んでいます。これが、県境にこだわって我が町を考えることの始まりでした。

40分間の演奏会は、体育館の静寂を破るのは響きわたるチャロとピアノの音だけという、すばらしいムードで、演奏者を自分と同じ

『県境ヤング進歩'89』

——県境一本松からの発信——

一本松町 尾崎 弘典

私の個人的な感想も含めて紹介させていただきます。

この会は、一本松町の主催で、県などから補助を受けて、一本松町連合青年団が中心となつて行いました。

▼ジャズ・エアロビクス

視線で見つめ、なおかつその息づかいが聞こえる距離で聴く名曲のすばらしさを満喫しました。

同時に、人を引きつける魅力と力には、やはりプロだなと感じ、最高だったと思います。

まし

▼「県境の町一本松」の名付け人

上田真二 チェロリサイタル

昨年の12月18日、「県境CLALA

SSIC」が行われ、「県境」と

「ダンスグループMOGA」の家木眞貴子さん、大野八重子さん、山下祐子さん、愛大ダンス部主将の西岡真美さんの四名の演技と指導のもと、私たちも共に汗を流して体を動かしました。

31市町村が、それぞれの特色を出し、我が町を売り出そうとする個性あふれるPRに、会場は笑いの渦でいっぱいとなりました。

他町村との比較や、特産品のパッ

初めて見るダンサーの迫力には圧倒される程のショックを受けました。体を動かすことの楽しき、汗をかくことのすばらしさを肌で感じることで知りました。

、新しい四国の文化づくり

ケージ一つを見ても、互いに良い勉強と刺激になつたと思います。ただ、一本松町内の方々への宣伝不足で、一般の方の参加が少なかつたと思います。今後への反省として受けとめたいと思います。

▼分散会・全体会

三つの会場に分かれての分散会



▲ 開会式——若干の緊張感が…



▲ 全体会の司会・パネラーの皆さん

では、青年団員の進行のもと、北川村・生名村・一本松町からの事例発表があり、「県境」に住んでいての生活実感や各分散会ごとのテーマについて意見交換がなされました。

助言者のアドバイスを受けながら、同じ県境に住む若者が、日頃の考え方を本音で語り合えたように思います。

全体会では、パネラー及び司会の方々から、「それぞれの地域で、若者がどう考え、どう行動していくべきなのか」を、数多く学ばせていただきました。

今回のシンポジウム開催にあたっては、講師の皆様をはじめ、陰でささえていただきました生活改善グループ、町年齢グループ、町職員の方々等多くの皆様に、言葉に詫びするとともに、厚くお礼申しあげます。

2月8日に企画を始めてから、4ヶ月余りの期間がありましたが、初めてということで不備な点も多々ありました。事業の必要性があるのかということも一番の難関でした。また、相手先への連絡の中で、知名度が少ない所ということも知らされました。

今回、いろんな人に会えて、助けていただき、数知れない勇気と感動を味わったことは言うまでもありません。人を信用するということは、自分に責任を持つことではないでしょうか？ 10歩譲つても、目的に進むためにはとても重要なことだと思います。

今後、地域にとってどれだけのネットワークを持っているかが大切だと思います。この「県境」を通じてできたネットワークを持つているかが大

▼はじめに
去る6月24・25日の二日間、南の県境の町一本松町で、四国では初めての試みともいえる『県境ヤング進歩』が開かれた。

このシンポジウムは、地元一本松町の青年団などが中心となって、『県境』という共通点を一つの切り口に、自分たちの地域やそこで生き方を考えてみようとするも

△渡部鬼子雄さん

若者には若者共通の意識、話題があり、初めて出会っても全く違和感がない。元気の源泉は仲間であり、今回の出会いを更につなげて欲しい。

やがて、過疎地が立ち挙がらざるをえない時が来る。そのためには、地域に、自分に、力を貯える時ではないだろうか。

「県境ヤング進歩、89」

(財)愛媛県まちづくり総合センター
に 参 加 し て
井 上 謙 二

△若松進一さん

ので、合わせて、「境」を越えたネットワーク、若者のつながりが広がればとの思いも、当然こめられていましたように思う。

プログラムは、若者による企画、運営らしく、テンポとバラエティーに富み、その計算し得ない部分でのスリルと期待を感じさせるものであった。

今、青年の力がまちづくりに活かされているだろうか。今回のシンポジウムでは、「カネは出すが口は出さない。責任は持つ。」という多くの方のバックアップがあつて、青年の力が引き出された。

これから地域づくりは、それが個性を発揮しながら、地域を越えてつながり合う「手離しの連帯」が大切だと思う。

▼全体会の語録から

日程	内 容	時 間	場 所
6/24(土)	内会式	13:00 ~ 14:00 (休憩)	
内会式	14:10 ~ 14:50 (休憩)	一本松小学校 校内運動場	
CLASSICコンサート	15:00 ~ 16:40 (休憩)		
JASSエアロビクス	16:00 ~ 16:40 (休憩)		
特産品のセリフ	16:50 ~ 18:00 (休憩)	あいぼの荘	
あいぼの湯温泉入浴 (マイクロバスで送迎)	18:50 ~ 19:30	あいぼの荘	
旅館ハーネス	19:40 ~	一本松山荘 開発センター	
旅館旅館朝食	7:30 ~ 8:00 食 8:20 ~ 8:50 (休憩)		
旅館	9:00 ~ 10:30	一本松山荘 開発センター	
分 質	会 10:40 ~ 11:50 (休憩)		
全 体	11:40 ~ 12:00 (誕生文化の発表を考える) 休	一本松山荘 開発センター	
休 会	12:40 ~ 13:30		

自分が元気になれば地域も元気

になる。感動を知る人間は感動を与える。自分から求めていく気持ちが必要だし、そのためには旅に出て、自分や地域を振り返るものも良いことだ。

私は青年団活動の中から、仲間ができたこと、自分の主張ができだしたこと、自分と地域とのかかわりの意識を得ることができた。

△家木真貴子さん▼

青年の自主的な力強さが文化を作っていくと思う。そのために自己改革する以外にないし、多くの人と接触したり海外を体験するなどから、カルチャーショックを自分に与えることだと思う。

私は、女の子にもっと頑張って欲しい。四国の女性は可愛らしい。でも、一步出る勇気が欲しい。

△上田真二さん▼

私は、まちづくりへの発想の転換が必要だと思う。グローバルな見方をするかしないか。このことが、毎日の生活を充実させ、人をより大きくさせるのではないだろうか。

うか。

各地を歩く中から、その地域に

根ざしたもの、人々の心に培われたものの大切さを再確認した。どこの地域でも、まず「人間」から、「文化」から考えることだと思う。文化は情報によって簡単に手に入るが、本当の文化とはそんなものではないと思う。



△ 分散会で、活発な意見交換

ための発想をして欲しい。

感動は汗と涙と酒=共感だと思ふ。また、汗は「ヒタイニカケ」という。ヒ=一人でするな。タ=他人にまかせるな。イ=いい格好するな。ニ=ニコニコ楽しめ。カ=型にはまるな。ケ=決して投げるな。

するな。ニ=ニコニコ楽しめ。カ=型にはまるな。ケ=決して投げるな。



△ リズムにののるのも大変だけど…

▼おわりに

「県境」の捉え方として、私は、「資源」としてではなく、一つの「切り口」と考えたい。

県境の地域の共通点、あるいは県境といえども異なること、そんな情報のやりとりのできる仲間のネットワークを、「境」を越えて広げていくことができたら、今回シンポジウムの意義はある様に思う。

今回の一本松の若者の、「境」を飛び越えた勇気を、更に自分の住む地域に向けて活かしていくためにも、今回の出会いを大切にしていただきたいし、仲間どうしの語り合いと、自分サイズの行動を大切にしていただきたいと思う。

最後に、お世話になりました皆様、本当にありがとうございました。再会を楽しみにしております。

また、今回の県境とか世代間などの交流・ネットワークを大切にしたい。本日のネットワークも、これで終わるのでなく、次へのステップを考えて欲しい。

カルチャーショックによって、発想を変えて地域を見る。自分が元気になり、自分が発信源になる



おたよりコーナーです。



いきなサークット

〒794-25 愛媛県越智郡生名村 ☎0897-75-2518



生名村
原山真治

生名村の原山真治さんよりおたよりをいただきました。ありがとうございます。

『いきなサークット』あなたも一度いかがですか？

大学を卒業して、今で三年目。卒業してすぐ私は、故郷である生名島へ帰ってきた。そのころ村では、造船不況のため若者、労働者達は村を捨て都会へ出て行き、急速に過疎化が進んでいた。

村役場・商工会の人たちは、いち早くその対策に取り組んでいた。私もある人の勧めで、その会議に出席したことはあったが、なにぶん大きな組織、一~二年で対応できるような案などあるわけがなかった。「十年後の生名村は、こうなります。」と青写真を見せられて、二十代の私には満足の行くものでなかつた。待っていられる訳が無かつた。商工会青年部の人たちも同じで、彼等は彼等で「手作りキャンプ場計画」をスタートさせていた。私は、自分がなんとか取り残されていました。

しかし私は、あきらめなかつた、その時すでにこれしかないと思い込んでいた。

それからというものの、ビデオ、雑誌ありとあらゆる資料を集め再び家族に相談した。わたしの熱意に、打たれたのかあきれたのか未ださだかで無いが、社長である父が「今の埋め立て地を地主に無理を言つて借りて、廃材を使ってやってみろ。だが交渉その他は自分でやれ。」といつてくれた。

久々に私は、燃える事ができ、今まで溜っていたものすべてを燃やした。そしてついに、

「付近に民家もないし騒音の心配もない、まして近県にもサークットはない。」「島に若者を集めるにはこれほどいいアイデアはない！」などと一人で思い込み家族にその夜相談したが、案の定相手にはされなかつた。

そしてまた、村の各団体へも相談したが、理解されなかつた。

しかし私は、あきらめなかつた、その時すでにこれしかないと想い込んでいた。

満足感にひたつていた。この時点で一応自分自身成功だと思った。そしてこの夏、テレビ大阪協賛の番組まで組むことになつた。今はそれに向けて燃えている。

「始める」とよりも、続ける事の方が大変なんだよ。」とある人にいわれたことがある。たしかにそう思う。島に人を呼ぶことそれが最初の目的だった。そして今は、島に人を呼び続けることの大変さを実感している。

たようで、焦りの頂点に達していた。しばらくの間であるにせよ、平々凡々と過ごしてきた自分がやけになさけなかつた。

ちょうどそのころ、仕事で、工事現場から切り取った土で水田跡地を埋め立てる仕事をしていた私は、トラックで土砂運搬中、ふとひらめいた。学生時代の趣味であった、ミニバイクレースのことである。「ここにミニバイクサークットを作つたらどうだろう……？」

「生きなサークット」と改名し全長五百メートルのサークットとすることができた。利用者も以前の二倍程になり、ますます活気を帯びた。そして毎月一回イベントとしてレースを開催し百台程のバイクを生名島に呼んだ。

また、八月に大イベントとして耐久レースをし、滋賀県・三重県・大阪府など遠方からも参加者が集まつた。村長もレーススタートの旗を振ってくれた。

満足感にひたつっていた。この時点で一応自分自身成功だと思った。そしてこの夏、テレビ大阪協賛の番組まで組むことになつた。今はそれに向けて燃えている。

「始める」とよりも、続ける事の方が大変なんだよ。」とある人にいわれたことがある。たしかにそう思う。島に人を呼ぶことそれが最初の目的だった。そして今は、島に人を呼び続けることの大変さを実感している。



吉田 健男 さん

これまで、文化的要素が必要だ
と多くの人々が語られて来てはいるものの、現実に、文化的要素が求めには、どのような手段を効じなければならぬのだろうか？

今、新居浜市は、四国の高速交通時代を迎え、南部観光レクリエーション開発、マリーナ計画など、国のリゾート開発の一翼を担う産業が生まれようとしている。昨今のロイヤルホテル新居浜進出は、市内の観光・レジャー関連を始め、その波及効果に多くの市民が期待を寄せている。

「人を 集める」

指針を求めて

た。日間に渡って活発な意見交換を行つ

セミナーには、西洋環境開発

地域開発部の土肥健夫氏を招き、

題提起を行つていただいた。また

参考文献として、東京デイズニーランドの誘致、岡山市制百周年記

念事業の総合プロジユーサーとし

て知られる堀 貞一郎氏（ランド・アソンエイツ^{（堀貞一郎）}）の著書『人

を集める——なぜ東京ディズニーラ

「学習を深め上で参加して人達約

二〇名が、新居浜に住んでいて日

頃それぞれの地域や職場で感じて
いる“人”を集める二二二ついて

いる人を集めることにいた。

土肥氏の提起は、多枝に渡った

①集客産業とは?
多くの人々を

集めることによって成功したビジ

②人を集めることの意義・役割。

③集客産業の分類

④集客の前提条件は何か、
⑤集客の要因は？

⑤集客の要因は?

私たちの会では、まちづくりの一方法論にとらわれるのでなく、もつと根本的な理念・戦略を持ち、

⑧イメージ化をどうするのか?
などについて、具体的な提言を織り
りさせて幅広い提言をいたしたい。
この中で、商店街については専
業店舗を作り、集客実験を行つて
マーケティングのリサーチをする
などの意見も――。

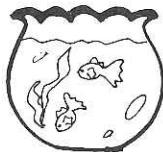
場合単独で機能するのではなく、それらの複合によって人が集まる。⑥新居浜市が都市として生き続けるためには何が必要か？町の魅力をいかに増していくか。⑦情報を自らつくり、自ら発信する。



えひめ地域づくり研究会議

まち全体としての生活機能をいかに高度化させていくなかで、その対象を①情報化時代の中でどのような情報戦略を持たなければならぬのか②まちを多機能化するにはどうしなければならないのか——など数々の問題が提起された。新居浜だけでいいのか、もつとインテグロックとして広域的にやっていくのかといった基本的な視点をもって、研究を進めたいきたい。

我々研究会グループは、町の中の集客に対する基本問題に対しても議論を重ね提言をつくっていく作業を重ねていきたいと思っています。



県内外の各地域で活躍される皆さんも、どうか応援して下さい。
我々研究会グループは、町の中の集客に対する基本問題に対して議論を重ね提言をつくっていく作業を重ねていきたいと思っています。

新居浜集客研究会の会員でふじ

結婚式場の専務藤田修生氏らまちづくりを考える市民グループが、別子銅山によって同市とかかわりの深い「銅」のイメージを生かし、「別子銅山跡地の観光開発が進む、南部観光レクリエーション開発に呼応して銅婚式を祝う場を作り、地域の活性化やイメージアップにつなげよう」と“フェスタ銅婚式記念披露パーティー”が新居浜市のふじ結婚式場で行われた。

新居浜集客研究会
吉田健男
研究会議 会員▽

新居浜集客研究会

新居浜市内で初めの試みとして行われた行事に参加者は、最初緊

張した様子だったが、次第にカッ普間にもうちとけた雰囲気が出ていた。

参加者の中には「銅の町のイメージアップや特色のあるまちづくりにしていくためにも今後も続けていっていただきたい。」となかなかの好評で語っていた。

「人を集める」

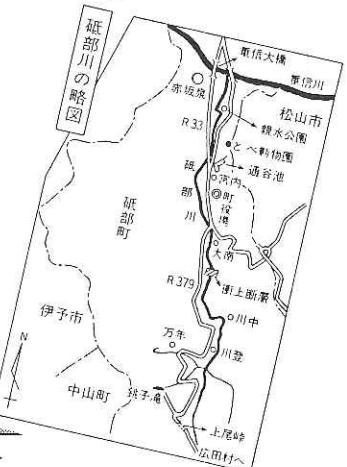
銅の町新居浜でフェスタ 「銅婚式」パーティー



「砥部川の望ましい姿を考える」

いきいき砥部を考える会

第一部会長 檜皮 孝夫



▼はじめに

「いきいき砥部を考える会」は、昭和六十三年六月に砥部町の音頭により発足した会です。これからの中づくりは行政だけがやつていればよいという時代ではなく、住民自らが考え実践していく必要があります。

このようなことから、自然・歴史・産業・観光の四つの部会がつくられたわけです。私たちの部会はその第一部会として、「砥部川を考える」というテーマのもとに検討を重ねてまいりました。

なにぶんにも、初めて出会う人ばかりであり、年令も職業も一定程度なく、どうなることやらといつた船出でした。一年間たって、九十二ページ（B5版）にもわたる報告書ができるとも思っておりませんでした。ご指導いただきまして日野先生や愛大の高橋先生をはじめとして、県や町の方々のおかげと深く感謝しております。

▼メンバーと経過

「いきいき砥部を考える会・第一部会」のメンバーは、別表のように、会社員三名・主婦六名・幼稚園の先生一名・無職一名の十一名です。

これまでの活動の経過は

昭和六十三年六月三十日
いきいき砥部を考える会発足会

昭和六十三年八月二十六日
砥部の自然について

（講師）日野先生

昭和六十三年九月十日
月を見る夕べ（懇親会）

昭和六十三年九月二十九日
自然の中でのいきいきとした暮らし（講師）愛大・高橋先生

昭和六十三年十月三十日

砥部川の現地見学会

昭和六十三年十一月二十五日
今後の河川のありかたについて

（講師）県河川課長・柿本先生

昭和六十三年十二月十四日
砥部川アンケートの集計作業

平成元年二月一日

アンケート調査の分析

平成元年二月二十三日
報告書原案の検討
平成元年六月十四日
検討事項の発表と提出

▼報告書の内容

砥部川は、七尾峠から砥部町の中心部を北進し、松山市の重信川と合流する全長七kmの川です。この報告書は、地形と地質、住民の関わり等の現況と課題、河川保全整備の基本理念、町内六ヶ所の水質の現況や、その汚染度、家庭排水等の関係を紹介し、町行政や家庭に浄化活動への取り組みを促すといった、七部構成になっています。

町民四〇〇人を対象に、砥部川のイメージや護岸工事について、汚れた原因、川にいなくなつた魚、昆虫・鳥、整備したい施設など十五項目のアンケート調査（回収率八十五%）を実施しました。その結果からは、砥部川のイメージは「汚くて、なじみのない川」がトップ、過去一年間土手や河原

えひめ地域づくり研究会議

＜いきいき砥部を考える会 第1部会＞

氏名	職業	住所
橋本只雄	北川毛区長	砥部町北川毛
森直樹	東建地質調査	砥部町宮内
直野清人	四電技術コンサルタント	砥部町宮内
檜皮孝夫	L A T環境設計事務所	砥部町宮内
向井清子	愛育幼稚園	砥部町大南
松田英子	主婦	砥部町岩谷口
玉井順子	主婦	砥部町大南
渡辺清香	主婦	砥部町大南
野中楓子	主婦	砥部町北川毛
山崎サトル	主婦	砥部町北川毛
細川五月	主婦	砥部町大南

で遊んだことのない人が八十五%を占めています。護岸工事で自然が失われていると思う人が八十一%。しかし、これ以上やるべきでないと答えた人は二十五%と少い。汚れた原因是「家庭の下水のたれ流し」と「ゴミの投げ捨て」と答える人が七十八%いました。

また、砥部川にいなくなつた魚はアユ、鳥はカワセミ、昆虫はホタルがトップ。美しい川を取りもどすための条件は、大半が「家庭

で有機リン洗剤を使わない」と考えていることも分かりました。

このような声をふまえ、報告書

では「美しく親しみのある砥部川の保全と整備」について提案しました。具体的には、

①洗剤が一定量しか出ない箱の開発をメーカーに願うなど、台所から汚れを追放する運動と広報活動の徹底。

②清流を残す赤坂泉・親水公園・

衝上断層公園の三ヶ所を、水に親しむ空間として整備する。

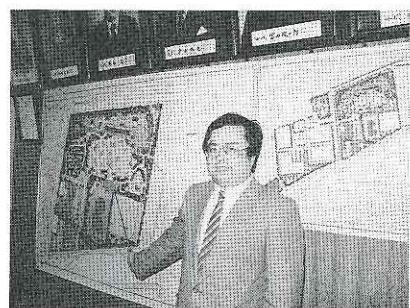
③護岸工事が必要な所は、自然石などを使つて周辺の景観と調和するような工夫が必要。以上のようなことを提案として取りまとめました。

▼おわりに
砥部川は砥部町民の心のふるさとといえる

この報告書で提案させていただけものは、表現が困難なものもありますが、今後砥部川の整備・保全を進めていく上で少しでも参考になればと思います。

また、このような会に参加できることは、貴重な体験として会員の今後にもきっと有益であったことと思います。こういった会では困難がつきもので、理想とするところまでいくのは大変ですが、その積み重ねが明日のより良いまちにつながることだと思います。

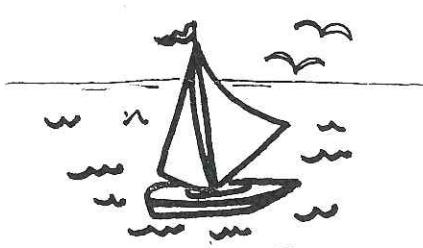
△えひめ地域づくり
研究会議 会員

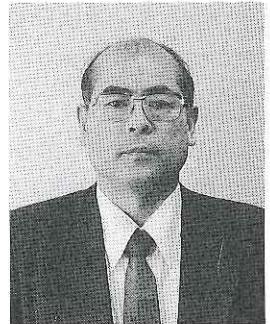


檜皮 孝夫さん

この報告書で提案させていただけものは、表現が困難なものもありますが、今後砥部川の整備・保全を進めていく上で少しでも参考になればと思います。

また、このような会に参加できることは、貴重な体験として会員の今後にもきっと有益であったことと思います。こういった会では困難がつきもので、理想とするところまでいくのは大変ですが、その積み重ねが明日のより良いまちにつながることだと思います。





高須賀忠篤さん

集つても意見がないというのがその理由である。

しかし、農協によつては、集りやすい小さな集会にしたり、会のすすめ方も、農協からの話は、あいさつを含めて三十分以内、一人の意見をもとに、みんなで話合わせるように工夫したり、女性だけの集会を企画し、婦人の意見を聞く努力をしている農協もある。

「地域づくり」について、与えられた紙面を、落書きでうめさせてもらうことをお許し下さい。

「地域」雑感

農協中央会

高須賀 忠 篤

肩書き抜きの会

農村健康問題懇談会

◎図書紹介

近況報告のあと、図書紹介がある。毎月何万冊となく発行される。毎月何万冊となく発行される。毎月何万冊となく発行される。本の中から、例会テーマと関係のあるもの、仲間に紹介したい本を選んで誰かが紹介する。その中にあらたな本との出逢いが生まれる。

◆ “組合員のための農協”といひながら、最近組合員の悩みやつぶやきへの耳の傾け方が少なくなつてゐるようだ。

昔はよく開かれた部落座談会も、最近は全くやつっていないという農協がふえてきた。

座談会を開いても集つて来ない、

さな用紙をくばり、今困つていること、婦人部や農協に対してもういふのである。意見によつて分類し、

みんなの努力を得ながら、一つ一つ応えて行く努力をしていた。もうその用紙を積み重ねると自分の背丈にもなつたと、宝物のようになつて寄り添つた安らぎだったので

自慢していた。それは組合員にびつたり寄り添つた安らぎだったのではないかと思う。

◆ 行政も「あなたの町です。みんなのための行政を」というが、みんなの声を聞くためにどんな努力をしているだろうか。

◆ もう十年余りも前の話だが、小さな集会や、研修会がある度に、参加者の一人一人に、心のつぶやきを書いてもらつて、出席したらしく案内状を出して音信不通が続

くと自然脱会。会費は参加費として毎回三百円。参考者の職業は、農家のお母さん、大学教授、学生、保健婦、医師、ジャーナリスト、お役人、農協職員……と多種。年齢もさまざま。しかし肩書き抜きの、一人の人間として参加しているのが特徴。

毎月の例会は、出席者の近況報告から始る。自分の仕事や生活の周辺で起きたこと、感じたことの中から、仲間に聞いてもらいたいことを手短かに話し合う。職業、経歴、年齢が違うから面白い。情報化時代は、世界の距離は縮めたが、身近かな生活情報は逆に遠くなつたようだ。

◎近況報告

毎月の例会は、出席者の近況報

告から始る。自分の仕事や生活の周辺で起きたこと、感じたことの中から、仲間に聞いてもらいたいことを手短かに話し合う。職業、経歴、年齢が違うから面白い。情報化時代は、世界の距離は縮めたが、身近かな生活情報は逆に遠くなつたようだ。

◆ 私たちは「農健懇」と呼んでいる。毎月集り続けて二百四十九回（二十年と九ヶ月）になる。誰かにさそられて、出席したらしくその時から仲間である。しかし案内状を出して音信不通が続

えひめ地域づくり研究会議



第209回の農健懇

- | | |
|---------------------------------|---|
| 四月 | 「農村女性の地位向上について」 |
| 五月 | 「まもり・まもられ育てるもの」 |
| 六月 | 「まもり・まもられ育てるもの」 |
| 七月 | 「老人ホームの
ふるさと訪問」 |
| 八月 | 「農村の健康とりハビリ」
(移動懇談会) 中山町 |
| 九月 | 「健康センター活動と
老人福祉」 |
| 十月 | 「老人と食べ物」
「広田が語るもの」 |
| 十一月「ひまわり号」と障害福祉
十二月「私と一九八八年」 | 佐伯 修二
宮本 七郎
山下 洋子
松浦千枝子
「農協生活活動と老人問題」 |
| 神開 君子 | 一人 一言
(持ち寄り忘年会) |

◎懇談会

例会の最後は懇談である。その月のテーマにもとづいて誰かが主論をつぶて話合う。

- 一九八八年のテーマを紹介しよ

四月
「農村女性の地位向上」

について

- 五月 「まもり・まもられ 永井 民枝

◎特別集会

一年間に二回の特別集会がある。

一回は夏の移動懇親会である
休暇を利用した一泊二日の会である。内容の一つは、地元との共

職場の忘年会と違うのは、一人一人一年間を振り返り、語り合う時間を持つていて、その割勘忘年会よりも、しみじみと心に残るものがある。

ト調査、地区集会。もう一つは現

地の、力がね、の和重慶は、ある。生活の場で考へることの重

もう一つの特別集会は、十二月

の「持ち寄り忘年会」である。全

貴は三百円位あるといふ

い物の持参である。いつも、ホテルや料理屋では出ない、各地の持

ルや料理屋には出ない、各地の特産が盛り上げられる。残りは分け合つてお土産とする。

(えひめ地域)づくり研究会議
運営委員



1984年4月 第186回農健貌

＊＊ あなたのコーナー ＊＊

◆『「」のまち!』

で楽しむ

川之江JC 谷井 裕

暑い夏の訪れとともに、各地で色々なイベントや祭りが始まろうとしています。川之江もその例にもれず、第十二回四国かわのえ紙まつりが七月二十二日～三十日に。そして今年は参議院選挙のため予定が変更された「かわのえ二十四時間映画祭」が八月五・六日に開催されます。これまで、市民手作りの祭・地場産業紙をテーマにしたユニークな祭・小さいまちの大きな祭……と様々な形容詞で『紙まつり』を表現したり、その時代なりの意味づけをしてきたように思います。

さて、最近生活の質の高度化といいまって豊かさ・暮らしやすさ生きがいの充実などを、その地域ごとに実現しようという動きが盛んになってきています。それとともに、あり余る情報を整理し、冷静に今の状況を見直す作業も始まっているようです。人々の意識が高

くなってきたどころではなく、それの問題について明確に独自の判断を下す。そして、より関心のあるモノや人にのみ集まり、それ以外のものからは離れていく。本当の意味で、独立した時代への移行ではないかと思います。

そんな事を考えながら、今はただ間近に迫った祭の準備に、八十名の仲間と一緒にヨナヨナ出歩き、呼び・笑い・語り・汗をかきながら楽しんでいます。もっと豊かに

イキイキと生きていきたい。どうせ一度しかない人生なのだから。このまちで住んで、住んで、住みこなしてやる。

俺たちのまちだぞ！川之江は！
△雄呼び ！！？

くつは、と今夜も出でていきます。
どこかへ……

◆『「」の頃思うこと』

宇和町役場

河野 豊昭

宇和町においてもいろんな層の方の町づくりの会も誕生し活動されています。役場職員のなかにも

二・三のグループがあり、その中のひとつMBGについて述べてみます。

MBG（中堅紳士淑女の会）は職員研修のひとつである主査職研修の反省会から誕生したもので、研修での連帯感をいつまでも持続していくこうということで当初は研修旅行と奉仕（清掃）活動を二本柱にしてきました。

ところが世の中、どこを見ても町づくり、村おこしの波にのまれて、MBGも活動の方向が自分たちだけの親睦の域を出て、町づくりへと流れしていくことになります。

自然のまま大気に身をまかせてみようとするのは私たち大人のノスタルジアであり、子供たちのロマンもあるわけです。

ひとつの事をやるにはいろんな意見や利害関係が発生し、時には淋しくなることもありますが、「私たちの子供の頃、学校には先生がいた」の映画ではありませんが、いつまでも夢を見る人間でありたいと思っています。

最後に、熱気球に関する情報をおもちの方は企画商工課 河野豊昭までご一報ください。

年のれんげ祭りでは遊覧飛行の切符切り（受付）をしたりで、町民の一人ひとりとして参加をしていくようになりました。

今、MBGで計画している事は、宇和町の空に熱気球を上げることです。

「まちづくりサロン」コーナーで、松山青年会議所の今井さんが、次のようにみなさんからのご意見を求めておられます。ご協力の程よろしくお願いします。

松山青年会議所(以下 松山JC)では、今年の9月17日(日)に第6回松山市民シンポジウムを企画しています。うちの委員会が担当でやっていますのでこのサロンを通じて約3ヶ月間意見交換をしたいと思っております。

私は、まちづくりは一人ひとりが個人として、家庭で、地域で、職場でできることを考え、実行していくことが大事なんじゃないかなと思っています。最近、松山にも素晴らしい人が沢山いることが分かってきました。

そうした、頑張っている人達を集めてイベントをやったらおもしろいんじゃないかなと企画しています。

シンポジウムも3つの分科会にわかれ、「女性からみたまつやま」「教育」「松山の未来構想」と行う予定ですが、参加してみて楽しい、知的興味を満たすようなシンポジウムをやりたいと考えています。そのためには、事前に色々な人の意見を聞いて、プレ報告書を作成して、当日の議論でさらに問題点を深めていく。その問題点・課題を次年度のJC活動なり、参加者の活動に結びつけられるようなシンポジウムにならいいなと思っています。

パソコン通信はそういう意味では、私の知らない情報を得たり、意見交換をするための一つの手段として使えるのではないかなどと勝手に思っています。

なにはともあれ、第6回松山市民シンポジウムの企画書をおくりますので、ご覧下さり建設的なご意見をお寄せ下さい。まだ、企画の段階でありますので、よい意見は取り入れていきたいと考えております。

第6回松山市民シンポジウム事業概要について

1. 目的 「集うまち・育つまち・生きるまち・まつやま」をメインテーマに、「ひと」をサブテーマとして、松山青年会議所の提言する「まつやま2001構想」を広く市民にアピールし、その実施計画のいくつかをイベントとして実践し、市民の方がイベントに参加することにより自分の身近にできるまちづくり運動とは何かを考える。
また、シンポジウムでは、今後のまちづくり運動の進め方をさぐる。
 2. 主催 (社)松山青年会議所・松山市
 3. 期日 平成元年9月17日(日)
 4. 場所 松山市総合コミュニティーセンター
 5. 事業内容
- ▼PART I : シンポジウム
まちづくり運動に関することを実践している人をパネラーにして、3分科会でのフロアーディスカッション形式の討論会を行う。
- ▼PART II : イベント
- (1) 青春文化祭(キャメリアホール)
松山青年会議所が作成する「まつやま人間贅歌」の紹介や、一般市民団体・学生等のさまざまなグループによる若者文化の紹介・実演。

- (2) 市民ふれあい市場(コミュニティープラザ)
市民・学校・福祉団体等に呼び掛け、手づくり作品や余剰品の販売等を行い、それぞれの活動資金として役立てるとともに利益の一部を「わかつかまつやま基金」に寄付していただく。
 - (3) レクリエーションイベント(体育館・子供館)
幼児・小・中学生を対象に家族で遊べるイベントを実施し、親子で楽しめる遊びを紹介・実演する。子供館では、砥部焼き絵付け教室も開催。
 - (4) ミニ四駆大会(体育館)
小・中学生を対象に、ミニ四駆のレースを催す。
 - (5) ストリートパフォーマンス(コミセン正面玄関前)
不特定多数の通行者にストリートパフォーマンスを楽しんでもらうため、スケートボード北四国大会等を正面玄関前にて実施する。
- ▼PART III : 特別イベント
『ミュージカルシアター'89』
ミュージカル「笑うまちかどラッキーカムカム」を9月28日・29日にキャメリアホールにて南海放送と共に催し、新しい松山文化としてのミュージカルを市民に楽しんでいただく。

Town タウン
パソコン通信ネットワーク

拡げましょう
ヒューマン
ネットワーク

Vol. 8



えひめコンピューターコミュニケーションクラブ

えひめ地域づくり研究会議

お・知・ら・せ

◆ミニ・シンポ「市町村の振興基本計画を考える……」の開催について

会員の皆さん等には先にご案内しておりますように、「市町村の振興基本計画を考える」研究集会を下記のとおり開催します。

1. とき 平成元年8月26日(土)・27日(日)
2. ところ 上浮穴郡久万町・久万町民館
3. 主催 (財)愛媛県市町村振興協会／えひめ地域づくり研究会議／久万町
(財)愛媛県まちづくり総合センター
4. 内容

◇ 26日(土) 10:10 開会／提言挨拶 久万町長 河野修さん
課題提起 久万町 玉水寿清さん
" 内子町 岡田文淑さん
11:00 事例講演 島根県吉田村 藤原洋さん
13:20 研究討議
15:00 総括講演 東京大学教養学部教授 大森彌さん
17:20 交流パーティー

◇ 27日(日) 9:00 エクスカーション(久万町内)野菜選果場・農産物加工場・町立美術館・
畑野川小学校・ふるさと旅行村など
12:00 昼食～解散



◆「第3回／自治体学会総会・シンポジウム」が、熊本市で開催されます。

1. とき 平成元年9月2日(土)・3日(日)
2. ところ 熊本市 ニュースカイホテルほか
3. 主催 自治体学会
4. 内容

- ◇ 2日(土)

9:00	開会	9:15全体会
10:00	分科会(6分科会)	
16:00	総会	
17:30	オプショナルツアーアウト	

- ◇ 3日(日)
前日の夜よりオプショナルツアー
① 熊本新町・古町タウン
ウォッチング
② 小国町遊学ツアー

※ 詳しくは、(財)愛媛県まちづくり総合センターまでお問い合わせ下さい。



二人のM.s.（丹下・久保田）まで。
〒七九〇 松山市道後一萬一の二
（助愛媛県まちづくり総合センター）
TEL ○八九九（二五）五五五七
FAX ○八九九（二五）六六八〇

次回「舞・たうん」特集は
“地域の暮らし
生産と流通”です。

空には入道雲が雄大にかまえ、青々とした山がいまにも迫ってきそうです。お元気ですか。

「舞・たうん」を送るたびに、「ありがとう」のお葉書をいただいたりすると、思わず笑顔がこぼれてきて、がんばろって思います。

内容についてのご意見や、活動内容についての記事など気楽にお寄せ下さい。